

# バックダンサーズ!

2006(平成18)年9月18日鑑賞(道頓堀東映パラス)

★★★



監督・脚本・音楽プロデューサー=永山耕三/出演=hiro/平山あや/ソニン/サエコ/長谷部優/田中圭/浅野和之/甲本雅裕/木村佳乃/北村有起哉/陣内孝則/つのだ☆ひろ/梶原善/豊原功補/舞/石野真子(ギャガ・コミュニケーションズ配給/2006年日本映画/117分)

……今、女の子が元気! 『東京フレンズ The Movie』に続いて、今度は大好きなダンスを通じて夢を叶える4人組の女の子が登場! もちろん、そこには微笑ましい恋やちょっと危なそうな恋も……? ポスト小泉の今、勝ち組・負け組批判から格差社会の是正が大合唱されているが、芸能界は生き馬の目を抜く競争社会で、消えていく方が多いのが実態……。もちろん、好きなことをやりたい、夢を叶えたいという想いは貴重だが、安易に「私もhiro たちに続いて……」と思うと、実力ありと思い込んでいるだけのあなたはちょっとヤバイかも……?

## テレビと映画の融合……?

「月9」とはフジテレビの月曜日午後9時から始まるドラマのことだが、これは『東京ラブストーリー』『ひとつ屋根の下』『ロングバケーション』等、視聴率獲得王の代名詞として使われている業界言葉……。その「月9」作品を中心に数多くのテレビドラマを手がけているのが、フジテレビの社員である永山耕三氏だが、才能溢れる彼(?)はそれ以外にもミュージカルや舞台の演出でも活躍しているうえ、ついにこの『バックダンサーズ!』で監督業にも初進出。もっとも、DVDドラマ『東京フレンズ』を映画化した監督第2作『東京フレンズ The Movie』(06年)は既に公開されていたから、彼の監督としての才能も既に公開済み。

最近は、『踊る大捜査線』『海猿』『電車男』などテレビドラマと映画との融合が急進展しており、パンフレットにある永山耕三氏のインタビューにおいても、「映画だからって、月9を演出するのと違いはない」とのことだから、この映画の鑑賞はテレビドラマの延長線のノリでオーケー……？

## 『東京フレンズ』に続いて、今、女の子が元気！

最近の大学生の就職戦線における、男子の軟弱ぶりと女子の健闘ぶりは際立っているようだが、その違いは将来に対する夢の持ち方の違い……？ それは芸能界や映画の世界でも同じで、男はとにかく現実的で早めに将来を見限るのに対し、女はいつまでも自分の夢を持つことに夢中になれる生きモノ……？

歌手を夢見て頑張り、大成功を取めた『東京フレンズ The Movie』の玲（大塚愛）や、とにかくダンスが好きでカッコ良く踊ることに情熱を燃やす『バックダンサーズ！』のよしか（hiro）やミウ（平山あや）の姿を見ていると、つくづくそう思ってしまう。もっとも、それは映画の世界だけの話で、現実はいくら夢を追っても食えない女の子がゴロゴロいるわけだが、少なくとも映画上では今、女の子が元気！

## これで退学……？

よしかとミウは踊ることが大好きな高校生で、18歳未満入場禁止の「クラブ」に行っているものの、勉強もきちんとやっており、品行方正そのもの。ところがこの映画では、そんなクラブに警察の抜き打ち捜査が入り、18歳未満の高校生たちを一斉に検挙。要領のいいよしかはすばやく裏口から逃げかけたが、忘れ物をしたドンくさいミウのため2人ともアウト！ その結果、よしかとミウは共に退学処分を喰ってしまったという筋書きだが、今ドキの、何でもありで自由な高校生活の中、こんな厳しい実態ってホントにあるの……？

## ムーンダンスクラブとは……？

ミウは自分の要領の悪さのためよしかを巻き添えにしてしまったことを気にしているが、よしかはいつまでもそんな風に気にされること自体が気に入らず、以

降2人は時々このテーマでケンカ……。そんな2人をムーンダンスクラブに案内したのは、同じく踊りが大好きな高校生(?)のジュリ(長谷部優)。ムーンダンスクラブとは、要するにただ広い駐車場のことで、スポットライトのかわりに月の光の下、ラジカセの音楽に合わせて踊るだけだから、そのように命名されたもの。私は時々、映画の帰りに夜自転車で扇町公園を通るが、そんな時必ずいるのがスケボーを練習している若者やダンスに興じている若者たち。

ここムーンダンスクラブは、そんな踊りの大好きな若者たちのたまり場で、ここなら誰にも気兼ねすることなく夜中まで(朝方まで)踊ることができるというわけだ。そして、そんな3人の踊りへの情熱に目をつけたのが、BOOTY RECORDのスカウトだった……。

### ともえと愛子を加えた5人組は……?

スカウトしたタレントたちをいつ、どういうタイミングで、どのような形でデビューさせるかは、すべてプロダクション側が決定権を持っているもの。

BOOTY RECORDが立てた戦略は、アイドル風のジュリをボーカルとし、そのバックをよしかとミウの他、ともえ(ソニン)と愛子(サエコ)を加えた4人のダンサーチームにすること。そんな5人組は「ジュリ with バックダンサーズ」と名づけられたが、意外にも(?)これが大ヒット。たちまちジュリ with バックダンサーズは、BOOTY RECORDのドル箱スターとなっていった。

もっとも、女が5人も集まれば大なり小なり不満があるのは当然で、愛子はなぜ自分がソロデビューできないのかと不満タラタラ。他方、そんな甘っちょろい考えの愛子を気に入らないのが、子連れながらそれを隠し、キャバクラ嬢No.1の地位を捨てて、ダンサーとして芸能界に入ってきたともえ。そして究極は、人気絶頂の時点で彼氏と結婚したいと言い始め、仲間のことを全く考えることなく、ライブの最中に突然引退宣言をしてしまったジュリ。こうなるとバックダンサーズ4人の行く先は……?

### おやじ軍団も元気!

陣内孝則演じるジョージはおやじロックバンド「スチールクレイジー」のボー

カル担当で、ねえちゃんと飲み屋と音楽しか知らないというヘンなおやじだが、それなりにカッコいいもの。昔、ソロアーティスト鈴木丈太郎としてリリースしたアルバムの曲をよしかが知っていたことで意気投合し、「おじさん、私50歳まではオーケーよ」という言葉に、ついいい雰囲気になりかけるほどこのおっさんは元気。もっとも、よしかのケイタイにかかってきた母親の名前が佐伯なおみ（石野真子）と表示されているのを見て、一気に元気おやじのスケベ心はしぼんでしまったが、それは一体なぜ……？

それはともかく、団塊の世代よりほぼ10歳若い陣内（1958年生まれ）世代が、この映画ではえらくカッコいい。ちなみに、スチールクレイジーのリーダーであるロジャーを演ずるつのだ☆ひろは1949年生まれだから、私と同じ団塊の世代。この映画がこういうおじさん世代をうまく描いたのは、さすが陣内世代永山耕三監督（1956年生まれ）の力量……？

## 「SPEED」解散後、久しぶりに観た「hiro」に感激！

今あらためてパンフレットを読むと、1984年に沖縄で生まれたhiroが、「SPEED」最年少メンバーとしてデビューしたのが1996年だから、何と12歳の時。そして、私がいつも飲み屋で歌っていた『White Love』が大ヒットした後、「SPEED」が解散したのが2000年だから、彼女が16歳の時とのこと。その後、彼女はソロ活動に専念し、さまざまな分野で活躍してきたが、ここ10年ほどテレビの歌番組などほとんど観なくなった私が、そんなhiroの姿を今回スクリーン上で観たのは久しぶり。

「バックダンサーズ」の事実上のリーダーとしてそのダンスの腕前を発揮しつつ、舞台におけるジョージとのデュエットや新曲の練習中に見せる歌の実力は、やはり大したもの。この映画への出演を契機として、歌に映画にミュージカルにとその活躍の場を広げ、人気と実力を兼ね備えたアーティストに成長してほしいものだ。

## 裏方は大変

この映画が面白いのは、芸能界の内幕を、虚実を含め隔々まで知り尽くしてい

る永山耕三監督が、アーティストの裏方となるレコード会社 **BOOTY RECORD** 第二制作部の姿を生々しく(?) 描いたこと。その中心人物は、バカがつくくらい純情な若手(新米?) 社員の茶野明(田中圭)。彼が仕事の枠を超えてバックダンサーズに入れ込んでいく姿はいかにも危なっかしいが、多くの人の共感を呼ぶもの。本来マネージャーとタレントとの恋愛は御法度だが、本音をぶつけ合う中で自然に惹かれ合っていく茶野とミウとの間の恋心の芽生えも興味深い。

これに対し、売れっ子には優しく、売れないアーティストには厳しいという最もイヤなタイプが小西部長(浅野和之)であり、彼におべんちゃらを並べて出世を狙うチーフマネージャーの高橋修(甲本雅裕)。裏方の大変さは理解できるものの、彼らのようにすべてを金や利害ではかる裏方ばかりでは、タレントもやってられないのは当たり前。その意味では、新米の茶野を温かく見守り、最後にはバックダンサーズのライブに多大な貢献をする宣伝担当の美浜礼子(木村佳乃)の存在はある意味理想型で、現実には無理な話……? このように芸能界や音楽業界の裏方の姿をしっかりと勉強できるから、この映画は面白い。

ちなみに、茶野が頼りにする音楽プロモーターの磯部元(梶原善)や、バックダンサーズに出演依頼をする大手アパレルブランド、サマンサタバサの宣伝部長の滝川(豊原功補)、そして秘かによしかに思いを寄せるDJのケン(北村有起哉)など、面白いキャラの人物がズラリ……。

## 今は「SPEED」ではなく、「dream」や舞……?

「バックダンサーズ」を従えてボーカルを歌うのは、よしかやミウと一緒に「ムーンダンスクラブ」でダンスを踊っていたジュリだが、長谷部優は2000年に「dream」として『Movin'on』でデビューした現役の歌手。また、「ジュリ with バックダンサーズ」に対抗心を燃やし、ジュリの突然の引退宣言後急速に人気を伸ばしていくのが、「真由 with スーパータイガース」のボーカル、如月真由(舞)。そして、この舞も2005年12月に『Reborn』でデビューした avex 期待の大型新人とのこと。

昔は自宅のテレビでよく音楽番組を観ていた私だが、最近はとんとご無沙汰。この映画を契機として、「SPEED」の思い出に浸るのではなく、こんな若手有望

株の歌手にもちゃんと目を向けなければ……。

## こんなゲリラライブは現実には夢のまた夢……？

『東京フレンズ』のラストは、武道館を満パイにする観客を集めたすごいライブだったが、「バックダンサーズ」をメインとしたダンスだけのライブは、ムーンダンスクラブの会場に仮設舞台を設置してのゲリラライブ。といっても、舞台の設営がほとんど終わり、宣伝からチケットの販売までほとんど終了した段階で、ゲリラライブだということが判明するのだが、それは映画の上だけでできることで、現実には絶対に無理な話……。

当然、この映画のクライマックスは、いったん離ればなれになってしまったバックダンサーズの4人が再びムーンダンスクラブで再会し、新人オーディションに応募する中、茶野らの努力によって実現したこのライブシーンだが、スクリーン上でみるような大がかりな仮設舞台が、警察の許可無しにできるはずがないし、チケットの販売ができるはずがないことは明らか……。ちなみに、スクリーン上には、現実にパトカーが数台駆けつけ、直ちにライブを中止するよう申し入れている姿が映し出されるが、それはちょっとした小競り合い程度で収まり、ライブは無事に大成功という筋書きとなっている。しかし、こんなゲリラライブの実現は夢のまた夢であるという現実は、決して忘れないように……。

2006（平成18）年9月20日記

## 表紙撮影の舞台裏（2）

このコラムは『パート7』の同名コラム（84頁）に続くもの。『SHOW-HEY シネマルーム』は毎回表紙と帯文が「売り」の1つだが、実は毎回これが難しく悩みの種。ちなみに、文芸社の07年2月における月刊帯文選評会で、自転車のハンドルを手に立つ坂和弁護士を表紙とした『パート11』の帯文がベスト6位に入るとともに、帯文プロジェクト委員賞を受賞した。この賞は得票数に関係なく、「質が高い」と認められるものをプロジェクト委員が選んだものだから、何ともグッド！

これを励みに、「坂和弁護士の素顔シリーズ」第2弾として『パート12』に登場したのは、さんさんと太陽光が降りそそぐ3レーン・20mプールの傍らでスーツ姿で微笑みながらポーズをとる私の雄姿。やはり弁護士と映画評論家の二足のわらじを履くには、体力勝負であることは明らかだ。このプールは、大阪難波にあるスイスホテル南海大阪（旧南海サウスタワーホテル）11Fのフィットネスクラブにあるもの。もっとも今の私の真骨頂はプールではなく、ランニングマシン。このクラブに入会したのは、90年4月の開業時だから既に17年。当初はせいぜい10～20分の自転車・ランニングとプールでの1km弱の水泳だったが、今では20km

走がヘッチャラ。さらに5kmと10kmマラソンに参加したことも計7回。したがって、41歳から58歳までの私の健康の源泉はこのクラブにあったと確信している。

ちなみに裏表紙にあるのは、私のランニングマシンでの雄姿（下記写真）の一部だが、左手に持つ六法全書と右手に持つ『時をかける少女』のパンフレットは弁護士と映画評論家という二足のわらじをばく今の私を象徴するもの……？

これからもこの「時をかける少女」のように、面白い人物や作品との出会いを求めて駆けていきたいものだ。

2007（平成19）年3月13日記

